

平成29年度秋田県総合政策審議会第1回ふるさと定着回帰部会（議事録要旨）

1 日時 平成29年7月18日（火）15：40～17：10

2 場所 県正庁

3 出席者（敬称略）

【ふるさと定着回帰部会委員】

藤原はるみ（幼保連携型認定こども園勝平幼稚園・ひよこ保育園園長）

藤原 弘章（NPO法人ふじさと元気塾理事長）

山崎 純（NPO法人子育て応援Seed理事長）

山本 智（農園レストラン「ハーベリー」代表）

伊藤 晴樹（男鹿市地域おこし協力隊員）

熊澤由紀代（秋田大学医学部附属病院産科婦人科講師）

三浦 元（有限会社ダイサン代表取締役）

【県】

高橋 修（あきた未来創造部次長）

真壁 善男（あきた未来創造部あきた未来戦略課長）

橋本 秀樹（あきた未来創造部あきた未来戦略課政策監）

久米 寿（あきた未来創造部移住・定住促進課長）

神谷 美来（あきた未来創造部次世代・女性活躍支援課長）

水澤 里利（あきた未来創造部次世代・女性活躍支援課政策監）

坂本 雅和（あきた未来創造部地域の元気創造課長）

伊藤 仁志（健康福祉部国保改革準備・医療指導室長）

齋藤 秀樹（生活環境部県民生活課政策監）

千葉 久雄（建設部技術管理課技術管理監）

田口 秀男（建設部下水道課長）

鈴木 和朗（教育庁幼保推進課長）

4 あいさつ（高橋あきた未来創造部次長）

- ・ 新しく委員となった皆様には、委員をお引き受けいただいたことに感謝申し上げます。
- ・ 本部会では、一昨年度に策定したあきた未来総合戦略でいうところの、産業振興に関する施策を除いた移住・定住や少子化、新たな地域社会の形成といった分野を所管することとなる。
- ・ 人口減少に関わる分野はなかなか成果が現れにくいところであるが、特に社会減について

ては、若い方の流出を止めることが必要であるし、自然減の面では出生数が減少しているのが問題となっており、ここ数年が正念場と考えている。

- ・ これぞといった決定打がない分野ではあるが、様々な施策を組み合わせることで成果をあげていきたい。この部会ではそれぞれの分野からの知見を得ながら、これからの運営指針としてのプランを策定していきたいと考えているので、活発な議論をお願いする。

5 委員の紹介

6 部会長あいさつ

- ・ 委員の顔ぶれも変わり、初めての方のフレッシュな視点とそれぞれの専門の知見からの意見を伺いながら、かなり短期間のスケジュールでの部会開催となるが、よろしく願いしたい。
- ・ なかなか出口の見えない問題であるが、何かしらの希望が見える提言書を策定していきたい。

7 事務局紹介

8 議事

(1) 専門部会の進め方について

□真壁あきた未来戦略課長

部会のスケジュール等について、総合政策審議会資料3及び部会資料-1、2により説明

●山本部会長

- ・ 進め方の関係で、質問、意見はあるか。

(なし)

(2) 第2期ふるさと秋田元気創造プランの取組状況について

□真壁あきた未来戦略課長

部会のスケジュール等について、総合政策審議会資料5により説明

●山本部会長

- ・ これまでの取組の棚卸しということだが、何か質問、意見はあるか。

●山崎委員

- ・ 新規高卒者を対象としてマッチング機会を増やしたということで、とてもいいことだと思っている。子育て支援に限らず何事も、当事者の声に耳を傾けることが大事だと常々思っているが、参加した高校生からのアンケートや感想などを聞いているようであれば教えてほしい。

□久米移住・定住促進課長

- ・ 雇用労働政策課で実施していた事業であるが、各年度ごとに参加した高校1年生を対象にアンケートを実施している。
- ・ 地元はどういった企業があるか、高校生や保護者にはわからないことが多く、役に立ったとの意見をいただいている。
- ・ 高校3年生向けの就職説明会はあるが、できるだけ早い機会に地元企業を知ってもらうため、今年度からは2年生向けに企業概要等の説明会を行っていく。

(3) 戦略の方向性について

□真壁あきた未来戦略課長

戦略の方向性について、総合政策審議会資料8及び部会資料3、4により説明

●山本部会長

- ・ 資料4の骨子案について、部会ではこれに厚みを持たせて提言としていくという認識で良いのか。

□真壁あきた未来戦略課長

- ・ プランの骨子案は、県がプランを策定していく中で作成し、9月には県議会に示す予定である。こちらにも意見をいただきながら、提言については、お手元に4年前の2期プラン策定時の提言を配っているが、そのような形でまとめるものであり、別のものである。

●山本部会長

- ・ 骨子案に意見を反映させつつ、第3期プランについての提言を別途委員の総意としてまとめるということによいか。

□真壁あきた未来戦略課長

- ・ 資料-2として、提言書の様式をお配りしているが、このような形式で提言書を策定するのが、部会に課せられたミッションである。

●山本部会長

- ・ 今回は1回目であるので、各委員の日ごろの活動や委員としてどのようなことを県に期待しているかというところを少しフリーな状態で各委員から話していただきたい。
- ・ 次回の第2回でプラン骨子案に対する意見を集約したい。
- ・ 短期間での開催なので、途中で委員同士メールでの意見交換を行いたい。委員の皆様から了承が得られたので、事務局から各委員のメールアドレスを委員全員にお知らせ願いたい。
- ・ 出席できない場合でも、意見を簡条書きで提出してほしい。
- ・ では、委員からそれぞれ5分程度発言をいただきたい。

●藤原（弘）委員

- ・ 教育行政と市町村が連携できないか。皆さん大学の話をよくされるが、私は高校生がキーではないかと思う。高校生が地域の問題を自分の問題として考えることが重要ではないか。
- ・ 小坂、十和田、二ツ井、五城目、羽後、六郷、雄物川など小さな学校で、市町村と教育が連携をとって地域の課題を高校生が解決する取組をし、地域をどうすればいいか見えてくるのではないか。そうすれば、彼らは外に出て行かないようになるのではないか。
- ・ 高校生が、子どもが地域の問題に取り組むとなるとむしろ大人もそれについていくのではないか。地域の問題を真剣に考える子どもたちが増えることで、秋田県を抜本的に変えることができると思う。
- ・ 地域づくりは「守り」の施策だというがある意味一番の「攻め」だと考えている。
- ・ 移住・定住については、県民も県も市町村も恥を捨てて、声を大にして「戻ってきてくれ」といってはどうか。PRの仕方ではなく正直な気持ちと、行政などの隙間で、能力のある若者が働ける受け皿としての雇用を確保する必要がある。給与の多寡ではなく、やりがいのある仕事があれば帰ってくる。

●伊藤委員

- ・ 大学生の時にARCグループという団体を立ち上げた。様々な学生と話して感じたのが、プロジェクトの立ち上げがわからないということだった。現在、県内の高校生や中学生を主体にワークショップを行い、学校とは別の学びの場を提供するL i f t - U p という学生団体や、国際教養大学において県内高校生にP B L（課題解決型学習）を用いてプロジェクトの作り方を教える団体もある。
- ・ 大学生からではなく、高校生のうちに地域のプロジェクトに関わることは大切なことで、学校のカリキュラムとはいかないかもしれないが、一度は秋田を出ても戻ってくるポイントとなるのではないか。県でスタディケースを重ねることで、地域の問題を学んだ上で、外で学んでから秋田に帰ってきて問題の解決に携わるような若者を増やせばよい。
- ・ 移住については、秋田の知名度は全国では決して高くない。それでも来てもらえれば住

んでもらえる可能性はある。自分の同僚、知人でも兵庫県や静岡県から秋田に住む人はいるので、魅力は絶対にある。その魅力をいかにして伝えるのが課題である。

●山本部長

- ・ 兵庫県から移住するという女性は、「秋田は自らの魅力を全然わかっていない」と言っていた。

●三浦委員

- ・ 県の元気ムラの取組、お互いさまスーパーの取組には会社として参画しており、同業の仲間の多くも元気ムラの山菜を置いたりして喜ばれている。秋田の食文化のレベルはとても高いが、その魅力を伝え切れていないと感じている。自分が携わる部分では秋田の魅力、食の魅力を伝えていくことが「攻め」取組と言える。
- ・ お互いさまスーパーの拠点を増やすために、ポイントとなるのは自分のこととして取り組む協力者を確保することだと考えている。
- ・ この機会に自分にも何ができるのか学ばせていただきたい。

●藤原（は）委員

- ・ 幼稚園、保育園がある勝平地区は人口減少が比較的ゆるやかなようである。当園が認定こども園になったことや、保育料助成もあってか第3子をもつ母親が増えているようにも感じている。
- ・ 保育をサービスと位置づけることで、子育てが人任せになってしまうようにも感じている。初めて歩くこと、離乳食を食べることなどに保育士だけが関わって感激するのではなくお母さんが関わって感激できる秋田県になってほしい。保育サービスという視点だけでなく、母親が子どもを大事にし、その子どもが親になったとき、また子どもを大事にするという視点を持つことができるよう、育児休暇をきちんととれるようになってほしいと考えている。
- ・ 秋田に帰ってきてほしいという気持ちで、子どもたちに秋田のいいところをたくさん教え、秋田のおいしいものをたくさん食べさせて、秋田っていいなあと思ってもらえるように毎日保育している。

●熊澤委員

- ・ 結婚するのが遅い、子どもを産むのが遅いという人が増えていて、そういう人たちに第2子、第3子を産んでほしいというのは厳しい。中学生、高校生から妊娠・出産や家庭を持つことを教えていけないのではないか。
- ・ 中高生を対象とした性教育の実施によって中絶を減らすことができたが、避妊について力を入れてきたものを、視点を変えて、妊娠出産から人生設計のところまで教えて

いく必要があるのではないか。

- ・ 3人子どもを産むとすれば、20代のうちに一人目を産まなければ難しい。子どもがいない人に一人目を、子どもが一人の人に二人目を産んでもらうのが現実的な政策ではないかと考える。
- ・ 大学にいる岩手県出身の学生などが、卒業後に奨学金を返さなければいけないので地元に戻るという話をよく聞くし、秋田県出身の優秀な人材が県外で活躍しているケースもよく聞く。優秀な人材についてサポートして秋田に戻ってきてもらえるような施策が必要ではないかと思う。

●山崎委員

- ・ NPOで子育て支援をして10数年になり、今は秋田市の施設である秋田市子ども広場の委託運営をしている。雇用の場でもあり、常勤、パート、サポーター合わせて19人で、働きやすい職場を目指して運営している。働きやすさは休みやすさであると実感している。
- ・ 休日には100組ほどの親子が来訪するが、父親が一人で子どもを連れてくる姿も多く見られる。そのことは、これまでの(男女共同参画に対する)学校教育や県の政策の成果の現れでもあり、父親も育児を楽しむという人が多くなったのではないかと思っている。
- ・ 私もAターンした一人だが、私の場合は、いずれ戻るつもりで秋田を離れ、出産後、秋田で子育てをしようと思って戻って来た。子育て以外の理由でも、これがあるから、今、秋田に戻ろうと思えるような、Aターンをするきっかけになるような、施策があればいいのではないか。

●山本部長

- ・ 三浦委員の経営するスーパー「ダイサン」は品揃えが面白く、経営のビジョンや理念がないとできないものだと思う。売上や原価だけでないビジョンや夢というものが必要だ。
- ・ 県の案にあるのはどちらかというと売上やコストの視点のように思える。文化や理念といったところに踏み込んだうえでメソッドを出してもらいたい。理念があれば、それは品揃えとなって出てくるものだ。
- ・ 県としてコンセンサスを得て理念を示すのは難しいものであるので、学問的な見地や県民目線での施策の棚卸しなどが一体となって、向こう4年間の秋田県の社会を未来創造部として見せてほしい。
- ・ どんな人であれ、秋田に生まれてよかったと思えるような秋田づくり、文化づくりとして来年から4年間、県民をリードして大きな流れを作っていってほしい。

□高橋あきた未来創造部次長

- ・ 県内移住者については、Aターンといっても8割はいわゆるUターンである。秋田の魅力はわかっているけど仕事がないということはあるが、秋田でしかできない暮らしを見せていきたい。
- ・ 若者の県内定着が最大の課題であり、高校生の県内就職率は現在65%であり目標は75%であるが、社会減の減少のためにはそれだけでは足りない。大学の定員が県内に少ないことから、ある程度一旦出て行ってしまおうとして、どうやって回帰してもらうかがポイントである。いかにして秋田での暮らしをイメージしてもらおうか。
- ・ 若い人の定着割合は県内でも差があって、秋田市周辺は低く、県南等は高いという傾向がある。秋田市の人口のダム機能が低下していることもある。そういったことを分析しながら進めていきたい。
- ・ 若者の力を取り入れる大人の技量、地域の力というものが求められているように感じている。キャリア教育から一歩踏み込んだ取組ができれば、長い目で見れば変わってくるのではないかと。2年前から高校生を対象としたふるさと教育の取組も続けている。
- ・ なかなか絞りきれないのがこの部会の難しさであるが、引き続き議論を深めていきたい。

●山本部長

- ・ 事務局から何か連絡事項はあるか。

□事務局

- ・ 次回の日程について確認
- ・ 委員のメールアドレスについては、皆様の了解を得て委員全員で共有する。意見や必要な資料については、メール等により事務局に連絡いただきたい。

●山本部長

- ・ では事務局に進行をお返す。

□事務局

- ・ 長時間にわたり熱心なご審議ありがとうございました。
- ・ これをもちまして第1回ふるさと定着回帰部会を閉会します。

以上